

前回はフェロセンに関連して少し脱線したが今回は話を元に戻して、レドックス電位がどのような要因で決まるかを続けよう。有機遷移金属化合物の多くで、 π 受容体であるカルボニル (CO) が配位すると電位がプラス方向に大きく傾く。これは、中心金属の d 電子の内、 π 対称性軌道から配位子の反結合性 π 軌道に逆供与 (バックドネーション) が起こり、結果として中心金属の電子密度が減るために起こる。金属カルボニル化合物は一般に高電位であり、カルボニルの数に比例して上昇する (図 1)。ひるがえって、カルボニルから見ると反結合性軌道電子の増加になるので C=O 結合が弱まり、CO 伸縮振動数の減少をまねく。それ故、赤外分光法から逆供与の程度を推算することが可能で、レドックス電位の測定と IR 測定がしばしば併用される。図 2 の化合物についての例を以下に示そう¹⁾。

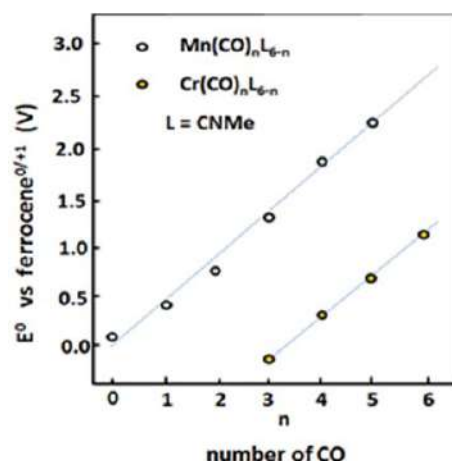


図 1. マンガンおよびクロム化合物のカルボニルをメチルイソシアネートで置換した時のレドックス電位の変化

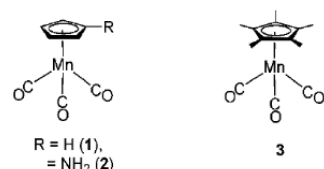


図 2. シマントレン化合物

シクロペンタジエニルトリカルボニルマンガン (1) はフェロセン基準で 0.92 V に可逆な酸化還元を示す。バルク酸化電解中のカルボニル領域の IR スペクトルを図 3 に示す。酸化されるとともに 1 に帰属される低波数側の 2 つのピークが減衰、高波数側に 1⁺ に帰属される 3 つのピークが現れ、電解が進むとともに吸収強度が増大してゆく。酸化によりマンガン周りの電子が減り、逆供与が減少する。それ故、Mn-CO 結合が弱まり、逆に CO 結合が強くなる結果を反映している。シクロペンタジエニル環にアミノ基やメチル基が置換した 2 や 3 は、1 よりレドックス電位は負方向である。これは置換基の電子供与性のためであり、逆供与を増やすので CO 伸縮振動数にも低波数シフトとして反映される (表参照)。

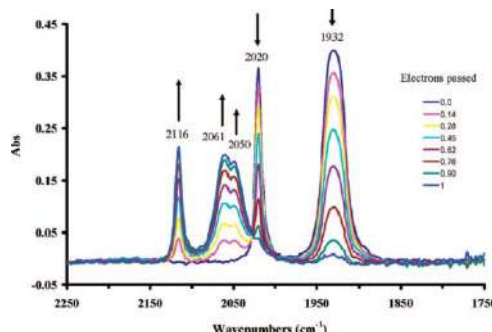


図 3. 化合物 1 のバルク酸化中の IR

1) W.E. Geiger et al., J. Am. Chem. Soc., 130, 9859 (2008)

	E _{1/2} (V)	$\nu_{\text{sym}}(\text{cm}^{-1})$	$\nu_{\text{asym}}(\text{cm}^{-1})$	$\nu_{\text{CO}}(\text{cm}^{-1})$
1	0.92	2020	1932	1963
1 ⁺		2116	2061, 2050	2078
2	0.62	2012	1921	1951
2 ⁺		2084	2032	2049
3	0.64	2004	1917	1946
3 ⁺		2093	2033	2053